

上郡町域の中世土師器

中井 淳史

はじめに

平成二八（二〇一六）年度から三〇（二〇一八）年度にかけて、上郡町教育委員会は赤松円心の館跡と伝える赤松居館跡の範囲確認調査をおこなった。礎石建物跡や溝、廃棄土坑などの遺構が検出され、大量の遺物が出土した。令和二（二〇二二）年に刊行された調査報告書からもわかるように、^①出土遺物の大半は土師器で、貿易陶磁器や国産陶器はきわめて少なかった。

このようなあり方は土師器が武家儀礼などの儀式として使用された可能性を想起させるもので、中世の居館遺跡ではしばしば観察される様相である。同時に、土師器以外の遺物が極端に少ない点はこの生活空間ではなかった可能性を示唆する要素であるともいえる。本稿では赤松居館跡の遺

跡としての評価についてはこれ以上は立ち入らないが、いずれにしてもこの種の議論を深めるには出土遺物の適切な評価、とりわけ大量に出土した土師器の位置づけが重要であることはいうまでもない。しかるに、考察の前提となる土師器の地域的様相に関していえば、現代の上郡町を含めた西播磨地域^②はその解明が立ち遅れた地域といわねばならないのが現状である。かつて稿者は、播磨全域の様相を検討するなかで西播磨についてもふれたことがあったが、^③旧稿では変遷のごく概要に触れ得たにすぎず、精緻な編年の構築には到底至らなかった。これはひとえに稿者の力量によるが、検討に耐えられるだけの良好な資料が乏しいこともまた事実である。近年あいついで報告された上郡町域の資料は、こうした問題点を克服する端緒になるだろう。本稿はそのとりかかりとして、まずは赤松居館跡の土師器の概要を整理したうえで、

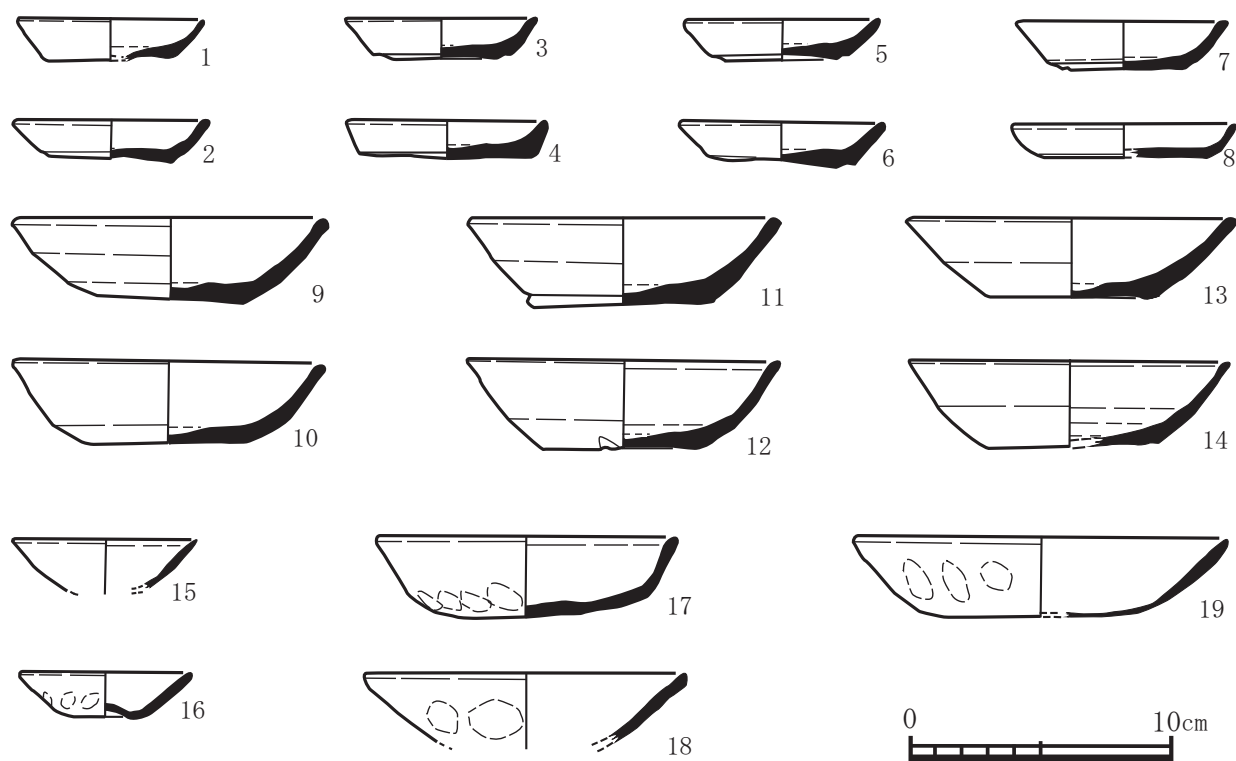
比較対象として町内遺跡のいくつかの資料を検討し、当該地域の中世土師器生産の展開を素描したい⁴⁾。

一、赤松居館跡の土師器

(1) 第一遺構面

赤松居館跡の発掘調査では遺構面が三面検出された。下層の第三遺構面は一部のトレンチでの部分的な検出にとどまるので、上層の第一遺構面と中層の第二遺構面から出土した土師器を検討する。

調査報告書では詳細な分類案が提示されている⁵⁾が、本稿では土師器の成形技術に基づき大別する分類に依拠し、ある程度まとまった量が確認できるタイプを中心にみてゆく⁶⁾。第一遺構面の一括資料として、SK五四から出土した土師器があげられる(第一図)。ロク口成形土師器と手づくね成形土師器の二種類が確認でき、総量のおよそ七割程度を前者が占める。前者は口径七・〇センチ、一二・〇センチの大小二法量が存在する(一一―一四)。いずれにも糸切り痕がのこるが、非常に不

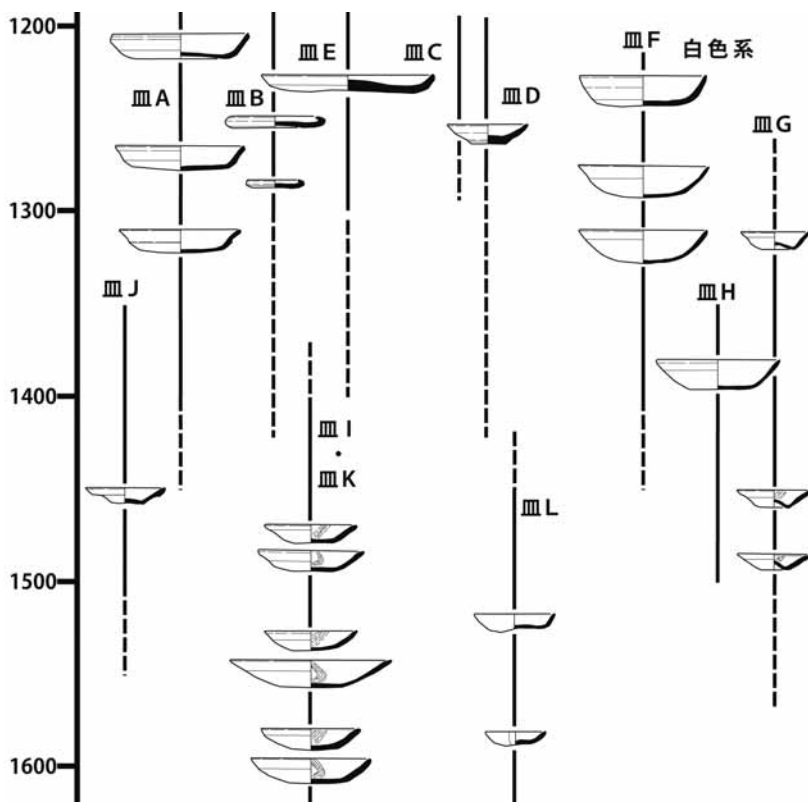


第一図 赤松居館跡SK五四(第一遺構面)出土の土師器 縮尺1/4

明瞭で視認しがたいものが多い。内外面をロクロナデするというこの種の土師器では典型的な整形手法をとるが、これも非常に不明瞭で弱い。一方で、ナデ調整にともなう同心円状の凹凸を見込み部分に明瞭にのこすもの（九など）もあつて個体差が著しい。胎土はいずれも精良で、淡赤褐色を呈する。

手づくね成形土師器は器形や整形手法において京都産土師器との共通性がみとめられる、いわゆる京都系土師器と呼ばれるものである（一五～一九）。粘土帯を巻き上げて皿形に成形したのち、底部を一方向にナデ、ついで体部内面から口縁部外面にかけての範囲を時計回りにヨコナデして整形する。赤松居館跡の手づくね土師器は、ややナデ調整が弱い傾向がみとめられるものの、手順としてはこのような京都産土師器の手法を踏襲する。京都産土師器の変遷概要を器形の分類とともに第二図に示したが、これと比べると一四世紀代にみられる器種、皿G、皿Fないし皿Hに類似する。口径は七・〇～八・〇センチ、一一・〇～一二・〇センチの大小二法量が主体であるが、さらに大

きい一五・〇センチ前後のものもごくわずかに存在するようだ。最も小さいサイズは京都産土師器皿G、俗に「へそ皿」と呼ばれるタイプを模倣したもので構成されている。底部を指先で押しくぼめて突起を作成する手法は京都と一致するが、体部が大きく開く側面観をもつものや、底部の凹みを持たないものもみられる。これに対して、口



第二図 京都産土師器の器種（中井二〇二二を改変）

径一・〇〇〜一二・〇センチ以上の大・中型皿は皿FないしHを模倣したものである。体部が開き、比較的器高の高い深みの器形である。全体的にナデ調整が弱く、粗雑な印象を受ける。とくに口縁部外面のナデの境界はほとんど視認できない。胎土の違いも勘案すれば、京都産土師器の搬入品ではなく、地元で模倣生産されたものと考えてよい。

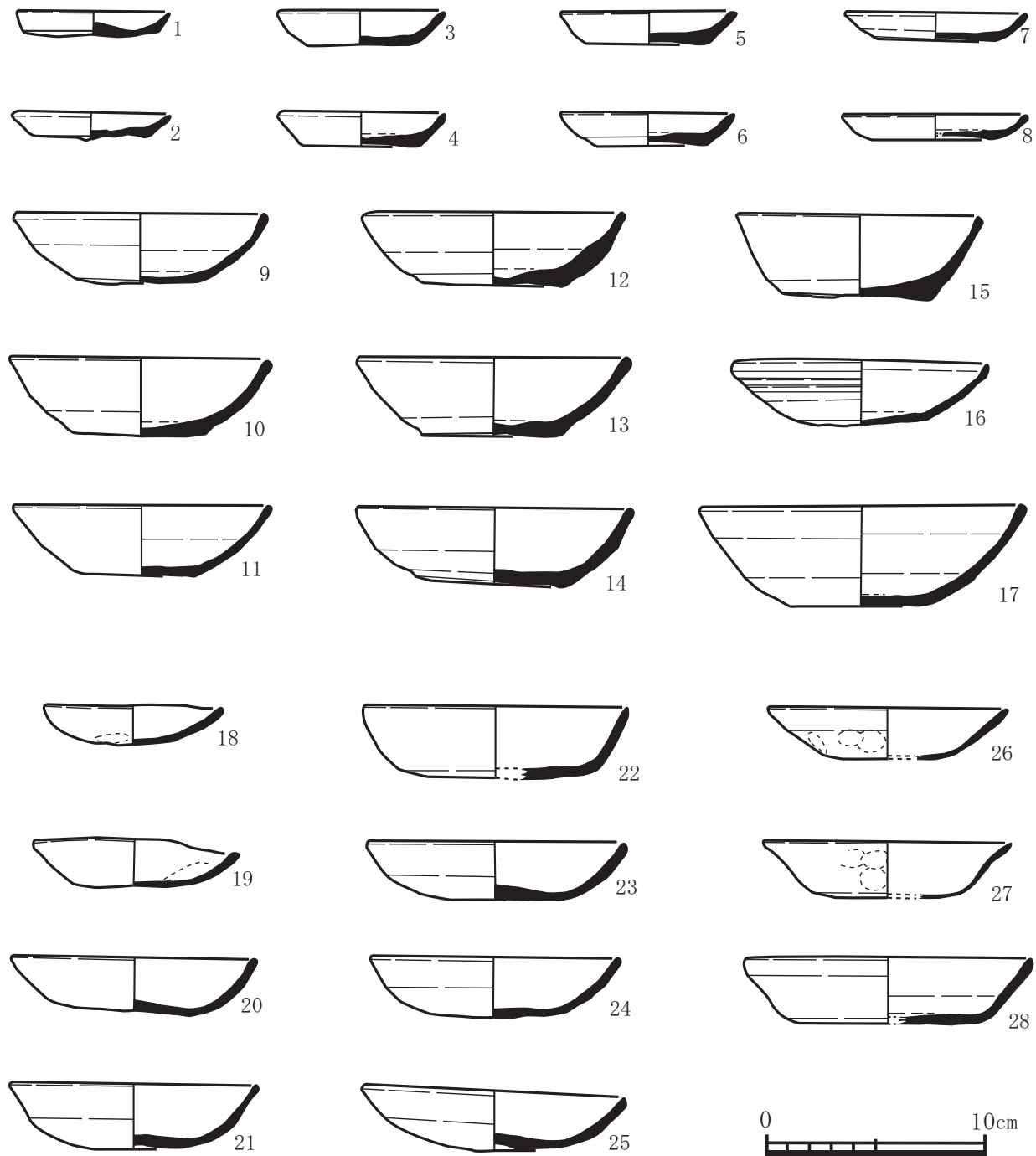
両種の土師器を比較して最も顕著に異なるのはその色調である。京都系土師器は淡乳褐色、乳灰色とおおむね白色系の色調を呈するのに対し、ロク口成形土師器は淡赤褐色の赤色系の色調である。胎土もロク口成形土師器より砂粒がやや多く、ザラつきのある質感である。京都では一三世紀後半ごろより一五世紀代にかけて赤・白の二種類の土師器があらわれ、これは文献史料でも「赤土器」「白土器」と確認できる⁽⁸⁾。赤松居館跡においても、同様に赤・白二種類の土師器が使用されていたことがわかる。

(2) 第二遺構面

土器溜SU七六から出土した土師器を検討する

(第二図)。こちらにもロク口成形・手づくね成形の二種類がみられるが、前者が大半を占める。ロク口成形は口径七・〇〜八・〇センチ、一一・〇〜一二・〇センチの大小二法量で構成される(一七〜一七)。大小ともに底径が大きく、小皿は扁平に、大皿は身の深い器形が主体となる傾向がみとめられる。内外面をロク口ナデする整形手法も第一遺構面の一群ときわだった違いはみいだがたい。注目されるのは、ロク口成形土師器のなかに白色を呈するものが少量ながら確認できる点である。あくまでロク口成形の技術体系に立脚している点で、京都産土師器とは根本的に異なっているが、土器の色調のみを模倣しようとした一群と評価できようか。

手づくね成形土師器についても基本的な傾向は第一遺構面と同一で、そのほとんどは京都系土師器に分類される一群である。同様に大小二、ないし大中小三法量が確認できる。小皿は京都産土師器の皿G、中大型皿は皿Fないし皿Hに類似する傾向がみられるが、本遺構では第三図一八・一九のように口縁の歪みが著しく、内外のナデ調整が



第三図 赤松居館跡SU七六（第二遺構面）出土の土師器 縮尺1/4

ほとんど確認できないものが出土している。また第一遺構面と比べると皿Gを模倣した小皿の数が少ないようにみうけられるが、これは時期差に起因するものとみてよいか、土師器使用の何らかの事情によるものとみてよいかは判断しがたい。

(3) 赤松居館跡出土土師器の年代

以上のように、赤松居館跡の土師器は大小二法量の赤色系ロク口成形土師器、大中小三法量の白色系京都系土師器で構成される。このほかごく少数ではあるが白色系のロク口成形土師器や、京都産土師器の影響が看取されない手づくね成形土師器がみられる。ロク口成形・京都系（手づくね成形）双方の法量分布はほぼ重なっており、全体としては大中小三法量の土師器が使用されたものと考えられる。

ここで、赤松居館跡から出土した土師器の暦年代について若干の私見を述べておきたい。赤松地区と守護赤松氏をめぐる問題について、赤松則祐から義則の時代にかけての段階的な整備を指摘する大村拓生氏の議論⁹⁾をふまえるならば、遺跡の性

格を多方面から考察し、評価するうえで考古学の側からの詳細な年代観の提示は避けて通れない。赤松居館跡の土師器はいつごろに位置づけられるのであろうか。

赤・白の土師器が明確にみられる点や、へそ皿(皿G)模倣の存在といった要素を鑑みても、赤松居館跡の土師器が一四世紀代におさまることはほぼまちがいあるまい。調査を担当した島田拓氏は、共伴する炭化物の放射性炭素年代の測定結果や第二遺構面(SU七六)で二点出土した備前焼播鉢の年代から、第一遺構面を一四世紀後半¹⁰⁾末、第二遺構面を一四世紀中ごろと想定する。これに従えば第二遺構面は赤松則祐、第一遺構面は赤松義則のころの整備改変とみることができる。

しかしながら、一四世紀代のどこにおさまるかはなお一考の余地があるだろう。最大の問題は、第一遺構面と第二遺構面の土師器の間に顕著な型式学的差異をみとめがたい点である。たとえばロク口成形土師器と京都系土師器の量比などには出土遺構や層位によって違いがみられるものの、個々の土器をみれば器形や細部形態において大きな変

化はみいだせず、型式学的な観点からみれば時期差を想定しがたいのである。第二遺構面SU七六で出土した備前焼播鉢は重根弘和氏の分類案⁽¹⁾に従えばおおむね Aにおさまるが、口縁部の発達具合に差があるので若干の幅を想定するほうが妥当なようだ。近年の研究で重根氏は Aの年代を一四世紀前半から一五世紀前半と幅広く想定している。年代を絞り込む決定的な根拠とはなりにくい。層位学的にみて第一遺構面と第二遺構面の新旧は明白であるが、そこにどの程度の時期幅をみるかに関しては良好な根拠が得られないのである。

模倣されている器種の組み合わせから考えれば、京都系土師器は一四世紀代、さらにいうならば後半代に比定できそうであるが、この時期は京都でも根拠資料の乏しさから年代の詳細な比定がむずかしい。そのうえ、赤松居館跡の土器は京都からの搬入品ではないので、京都の年代観はあくまでもおおよその目安にしかならない。また冒頭でも述べたように、西播磨地域の土器様相も未解明であるために、周辺資料との比較も困難である。要

するに、赤松則祐から義則の時代にかけて段階的な整備がすすんだとする文献史学の側の歴史像に對して、考古資料の分析からはおおむね義則期までとは指摘できたとしても、則祐期まで確実にさかのぼるとまでは断言しがたいのである。本稿ではさしあたり、第一・第二遺構面の出土資料を大きく一四世紀後半代（第三・第四四半期）ととらえておきたい。これは報告書で示された年代観の修正や否定を意図するものではなく、現状の土器研究では年代観についてなお問題をのこすことを指摘するものである。このような曖昧さがのこるのは、土師器とのクロスチェックを可能にする共伴遺物が赤松居館跡でほとんど出土していない点も一因にある。

二、上郡町内遺跡群の土師器

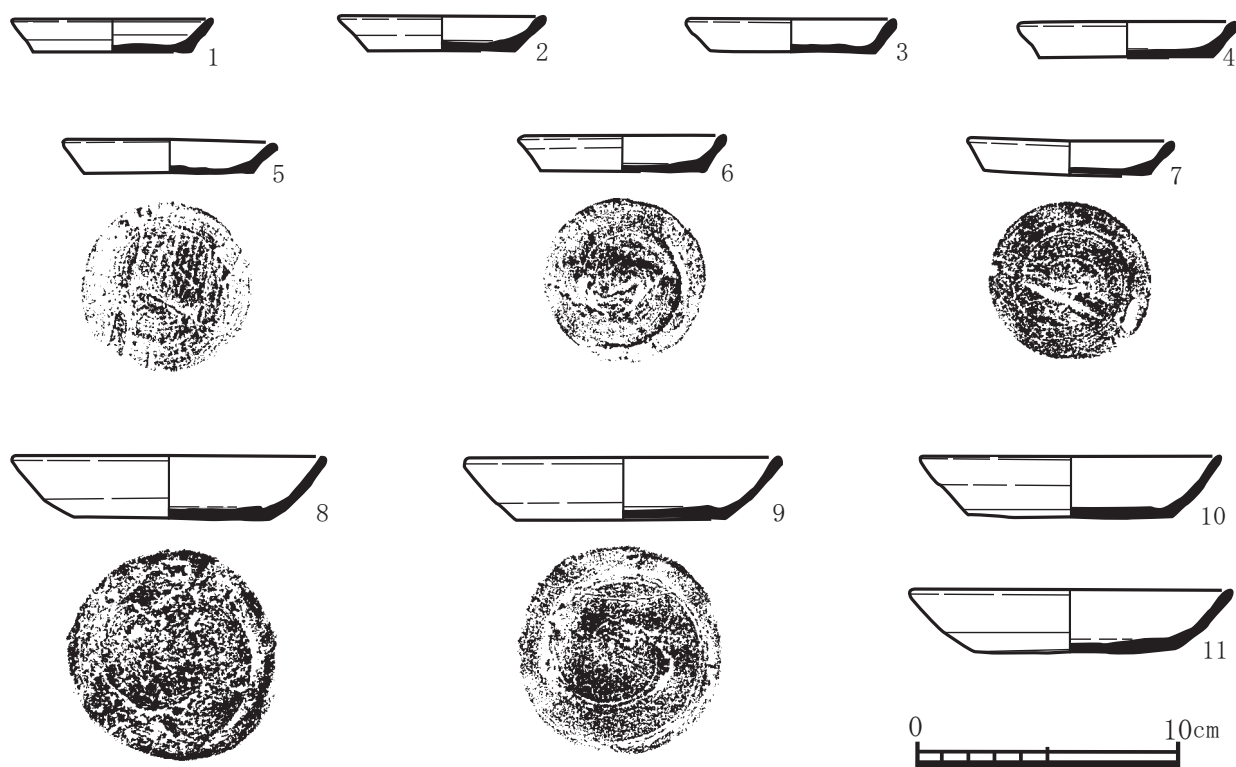
(1) 赤松遺跡

つぎに町内遺跡の出土例をいくつか検討して上郡町域の土師器生産の展開をとらえ、その特質を考察したい。まずは赤松遺跡の資料を俎上に載せ

る。赤松居館跡の隣接地にあたる現代の赤松集落で出土した資料である¹²⁾。

ここでは上層の遺構面で検出された廃棄土坑SK〇九の土師器をみる(第四図)。すべてロクロ成形土師器で構成される。赤松居館跡と同様、淡赤褐色を呈するものが主体であるが、わずかながらクリーム色を呈した白色系のももある。法量は口径八・〇センチ(一〜七)、一一・〇〜一二・〇センチ(八〜一一)の大小二法量で、ともに底径が大きめで、短い体部が直線的にたちあがる器形である。大皿の器高は二・〇センチ程度で、三・〇センチ前後を測る赤松居館跡の土師器と比べるとその差は著しい。また、概してロクロ成形土師器は成形手法の問題から体部と比べて底部の厚さが極端に厚くなるものが多いが、本資料は厚さ四ミリ程度でおさめられており、体部とほぼ同じ厚さに仕上げられている。

赤松居館跡の土師器ともっとも顕著に異なるのは底部切り離し手法である。これは成形後に回転台(ロクロ)から製品を切り離す時の技術であるが、赤松居館跡の土師器が痕跡が非常に不明瞭な



第四図 赤松遺跡SK〇九出土の土師器 縮尺1/4

からも糸を用いて切り離していたのに対し（糸切り）、赤松遺跡の土師器はすべてヘラを用いた切り離しがなされている（ヘラ切り）。

SK〇九はロクロ成形土師器しかみられないが、検出遺構面の覆土にあたる遺物包含層ではわずかながら手づくね成形土師器（京都系土師器）が出土している。ロクロ成形土師器は法量や器形、整形技術においてSK〇九と明確な相違はみいだせない。型式差はなく、きわめて近い時期のものと考えてよさそうだ。京都系土師器は細片が多いが、口径七・〇センチのへそ皿（皿G）模倣、一一・〇センチ前後の皿H模倣のものが確認できる。これらは白色系の色調である。

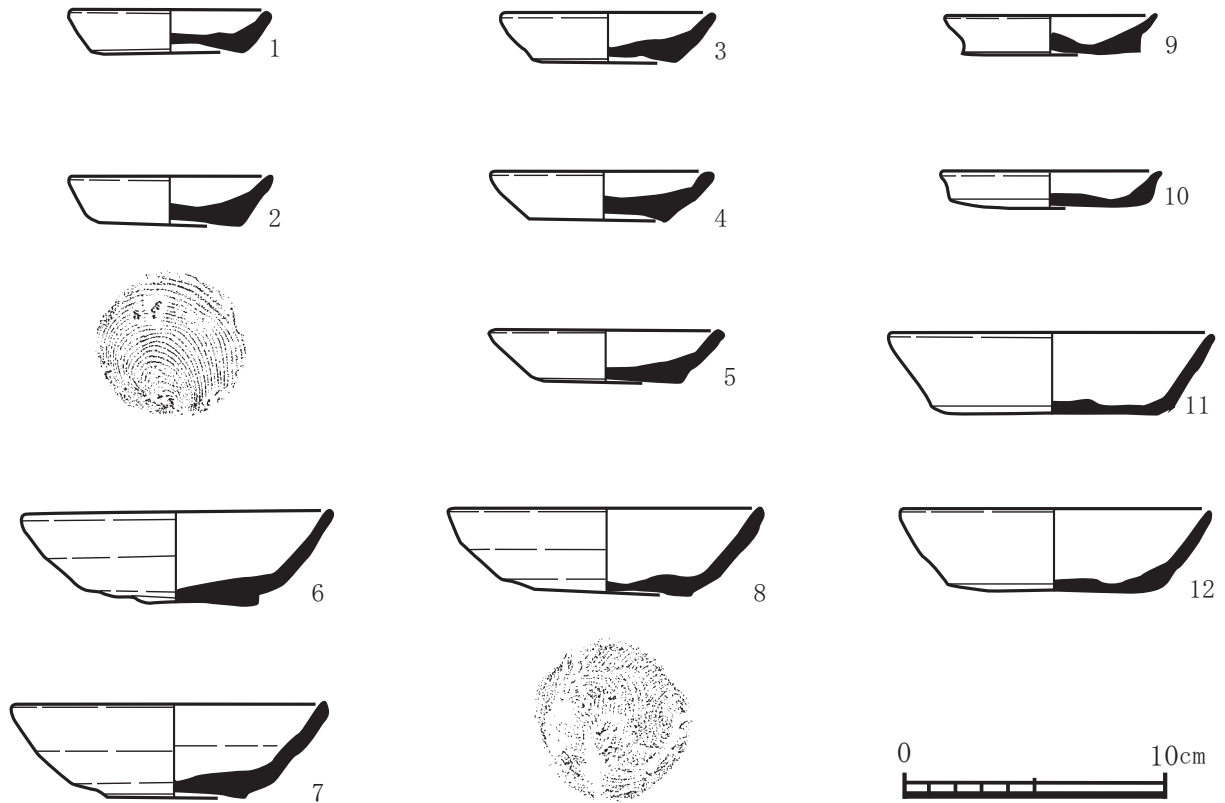
小規模の調査のために遺構の性格も遺跡全体のなかでの位置づけも判然としないこともあって、これらの土師器の評価もまたむずかしい課題である⁽¹³⁾。底部ヘラ切りのロクロ成形土師器のみで構成される点は、時期的な変化ともとらえられるし、使用や廃棄の事情によっても解釈できるが、次節でみる山野里宿遺跡との類似点を考えるならば、調査報告書でも指摘されているように⁽¹⁴⁾、ロクロ成

形土師器の成形手法が変化し、手づくね成形土師器の量が変動するこの地域の土師器様相の一段階とみるのが妥当であるように思われる。この点は次章であらためて論じたい。

（2）山野里宿遺跡

赤松集落より南方約五キロ、千種川の支流安室川沿いに位置し、山陽道沿いの宿と考えられる遺跡である。兵庫県教育委員会および上郡町教育委員会によって調査がおこなわれているが、ここでは前者の調査成果をみてゆく⁽¹⁵⁾。

県教委の調査では旧河道より大量の土師器が出土した。ここでは最下層で一括出土した一群をみてみよう（第五図）。すべてロクロ成形土師器⁽¹⁶⁾で、口径七・〇〜八・〇センチ、一一・〇センチの大小二法量である。大皿・小皿いずれも黄橙色を呈するものが多く、これまでの資料と比べると明瞭な赤・白の区別はみられない。底部は糸切り底を持つものが大半で（一〜八）、ヘラ切り底はわずかである（九〜一二）。小皿は体部が短く扁平な器形で、内外面をロクロナデする。これは赤松居



第五図 山野里宿遺跡旧河道出土（最下層一括）の土師器 縮尺1/4

館跡などでもみられる特徴であるが、本資料はやや底部の肥厚が顕著である。大皿は調査報告書では「椀」としているように、器高三・〇センチ前後を呈するものが多く、深身の器形である。体部はわずかに内湾しながら立ち上がり、内外面を口クロナデする。

これらは旧河道という遺構の性格からみても相應の時期幅を想定しておく必要がある。旧河道の共伴遺物としては須恵器すり鉢や備前焼甕、瓦質土器鍋などが報告されているが、備前焼をみると口縁部が外側に反るタイプや断面長楕円形の玉縁口縁をなすタイプがみられ、前者は一三世紀代、後者は一五世紀代とかなりの時期幅がある。調査報告書は旧河道の中心的な時期として一五世紀中ごろ後半を想定するが、土師器と同じ最下層で出土した備前焼甕は重根氏の編年案でいえば A、おおむねその新相に位置づけられそうである。根拠はやや弱いが一五世紀前半を中心とした年代を想定しておきたい。

(3) 上郡町内の遺跡

上郡町内ではこれら以外にも中世の遺物が出土している。未報告のものもあるが、今回実見の機会を得たので、あくまでも稿者の所見として若干ふれておきたい。

宝林寺遺跡は千種川をはさんで赤松地区の西側、河野原地区に所在する宝林寺境内を含む一帯である。宝林寺は赤松則祐が雪村友梅を開山として建立した寺院である。もと備前国新田荘にあったのが、焼亡後の文和四(一三五五)年に河野原へ移転したという。

小規模なトレンチ調査であるために遺構の状況は不明であるが、ロク口成形土師器と手づくね成形土師器(京都系土師器)が出土している。前者は細片のために実態は把握できないが、京都系土師器は口径八・〇センチ前後を測る皿G(へそ皿)がある。体部が開く形状は京都産土師器と大きく異なっており、ナデ調整も弱く、とくに京都産土師器で特徴的な斜行ナデ上げは確認できない。ナデ調整が不明瞭である点は、これまでみてきた赤松地区の資料と共通する特徴である。このほか、

細片のために正確な法量復元が困難ながら、口径二〇・〇センチ前後になると推測される極端に大きな皿がみられる点は注目される。これは京都産土師器の皿Kを模倣したものである。このサイズは京都ではおおむね一五世紀後半ごろよりめだつものなので、本資料もそのころに位置づけて大過あるまい。厳密な共伴関係は不明ながら貿易陶磁器や備前焼、瀬戸焼が出土しており、これらの年代観とも矛盾しない。年代の定点を一五世紀後半ごろにおける資料である。

西野山堀遺跡は町南部に位置する遺跡で、居館跡と想定されている¹⁸⁾。土師器はすべてロク口成形土師器で、糸切り底を持つものが主体となるようである。淡赤褐色、橙褐色を呈する赤色系のもものが中心で、白色系のもものはみられない。胎土は白色粒や赤色粒を含むザラつきのある胎土で、赤松地区の土師器とは異なる。口径八・〇センチ、一・二・〇センチの大小二法量で構成される。小皿は直立気味にたちあがる短い体部を持つ扁平な器形で、型式学的には赤松居館跡などの土師器に先行するタイプになるか。大皿は器高三・〇センチ内

外のやや深身の器形で、内湾気味の体部を持つ。良好な一括資料を欠くものの、共伴して出土している備前焼は 期のものが中心であることに注目するならば、一四世紀から一五世紀前半にかけての年代が考えられそうだ。

町の南西端、旧備前国に至る船坂峠の麓にあたる梨ヶ原宿遺跡では、細片のために口径の厳密な復元が難しいが、おおむね大小二法量の土師器が出土している。⁽¹⁹⁾ 橙褐色を呈し若干ザラつきのある胎土は、赤松地区の土師器と比べると違和感がある。土師器はロク口成形で、底部はヘラ切りである。備前焼摺鉢が共伴しているが 期以降のものが多く、時期幅を考える必要があるが、一五世紀代を中心とした時期と想定される。

三、上郡町域における中世土師器生産

(1) 上郡町域における中世土師器の展開

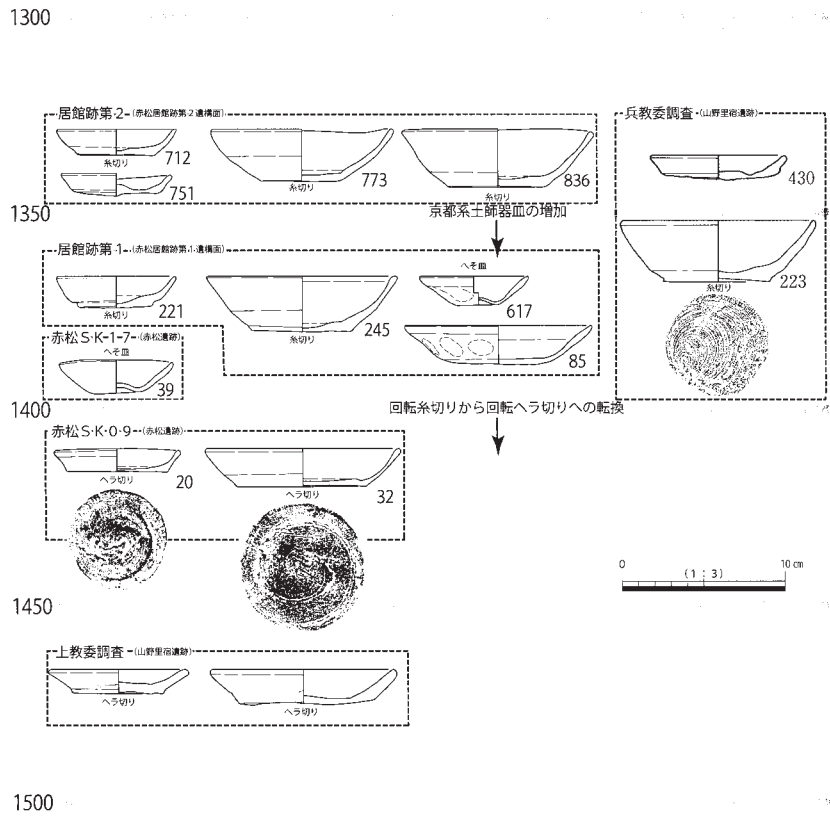
以上、赤松地区を中心に上郡町内のいくつかの資料を概観した。以上の年代について整理をおこなったうえで、当該地域の土師器生産の特徴を論

ずる。

赤松居館跡や赤松遺跡、山野里宿遺跡の土師器については、島田拓氏が変遷案を提示している。⁽²⁰⁾ 第一章でふれたように、一四世紀中ごろの赤松居館跡第二遺構面、一四世紀後半の赤松居館跡第一遺構面、赤松遺跡SK〇九はそれに続く一五世紀前半代としたうえで、赤松遺跡の下層遺構SK一七は京都系土師器の共通性から居館跡第一遺構面併行、山野里宿遺跡旧河道はロク口成形土師器の器形の共通性から一四世紀中後半代とする⁽²¹⁾ (第六図)。赤松居館跡は系切り底のロク口成形土師器、赤松遺跡はヘラ切り底のロク口成形土師器がみられることから、底部切り離し手法が一四世紀を境に系切りからヘラ切りへと変化する過程が浮かび上がってくる。しかしながら、前章の検討をふまえるならばその年代観はなお流動的である。

前章第三節でとりあげた宝林寺遺跡の土師器は、ロク口成形土師器の実態がとらえがたいものの、口径二〇・〇センチを超える大型の手づくね(京都系)成形土師器皿の存在は京都産土師器の編年と照らし合わせても一四世紀代とは考えがたく、

先述の通り一五世紀後半代とみるのが妥当である。西野山堀遺跡、梨ヶ原宿遺跡は時期幅を大きくとらえる必要がありそうだが、いずれも一五世紀代を含む資料と考えることはできるだろう。一五世紀以降の資料の厳密な先後関係の確定は困難であるが、このように整理をすると、土師器様相



第六図 千種川流域の土師器皿の変遷（島田二〇二一）

について上郡町域の南北で地域差があり、また製作技術に関しても複数の手法が混在していた様相がみえてくるように思われる。

（2）上郡町域の中世土師器生産の特質

上郡町域の土師器の特質としては、まず第一に多くの遺跡で相当量のロク口成形土師器が出土している点をあげることができる。近畿地方は基本的には手づくね成形技術が浸透しており、それより西ではロク口成形技術が採用されていた。播磨地域はその辺境にあたる位置であるためか、ロク口成形土師器の生産が局地的に展開していたことがすでに明らかになっているが、量的には主体的な生産であったとはいえない。しかしながら、上郡町域はむしろロク口成形土師器が主体となっている遺跡が大半なのである。近畿地方よりもむしろ、山陽地方に近いあり方と評価することができ

るだろう。ロク口成形土師器の底部切り離しにヘラ切り手法がみられる点は、その傍証となり得よう。これは備前・備後や讃岐・伊予・阿波一帯の瀬戸内・

四国地方のク口成形土師器にみられる特徴で、備前や備後では中世前期・後期を通じて、四国では中世前期を中心にみられる⁽²³⁾。備前の特徴的な土器といえる回転ヘラ切り手法を基盤とした吉備系土師質土器碗そのものの出土はみられないが、先述の体部が短い扁平な小皿は備前でも一四世紀以降によくみられることを考えれば⁽²⁴⁾、上郡町域のク口成形土師器生産の技術は西からの影響を考えるのが妥当と思われる。

底部切り離し手法について、先述の島田氏の変遷案に従うならば糸切りからヘラ切りという変化を考えられそうであるが、これも大枠としてそのような傾向はあるとしても、現実的には明瞭な段階的变化というよりは錯綜した変化であったように思われる。山野里宿遺跡や西野山堀遺跡のように、一五世紀代においても両者が併存する事例がみられるからである。中世の土師器生産は、一郡規模で複数の工人が居住して従事していた状態が考えられるが⁽²⁵⁾、このようなモデルが正しければ、糸切り手法を採用する工人とヘラ切り手法を採用する工人が併存していた可能性は十分に考えられ

る。実際、赤松地区の土師器と、町南部の山野里宿遺跡や西野山堀遺跡の土師器とを比べると胎土の質にちがいがみられ、原料採取地が異なっていたようである。上郡町域にどの程度の数の土師器工人が展開していたかを明確に論ずることはむずかしいが、さしあたっては底部切り離しの手法を異にする複数の工人集団が混在していた状況から、徐々にヘラ切り手法へと収斂していった姿を考えておきたい。この想定が正しければ、中世後期でも糸切り手法が併存する備前や、糸切り手法主体へ変化する四国地方とはまったく逆の変化ということになるが、その検証は資料の蓄積をまつて今後の課題としたい。

本地域の特徴としてもうひとつ指摘すべきは京都系土師器の存在である。兵庫県下では一二世紀後半ごろの福原京周辺の遺跡（神戸市祇園遺跡、同楠・荒田町遺跡など⁽²⁶⁾）をのぞけば中世前期の京都系土師器出土例はみあたらず、一四世紀代までさかのぼるものは中郡多可町内でみられる程度である⁽²⁷⁾。京都産土師器の皿Gや皿F、皿Hといった一四世紀の器種を模倣したあり方は、播磨全体を

みわたしても古い事例と評価できる。その後の推移を連続的に追跡できるだけの材料はなお乏しいものの、宝林寺遺跡の資料を積極的に評価するならば、京都系土師器の生産は一五世紀後半代までは続いていたように思われる。

このようなあり方は赤松地区周辺に限定されていた可能性が高い。これまでみてきたように、京都系土師器の出土は現在のところ、赤松居館跡や宝林寺遺跡にほぼ限定されるからである。これまでに再三指摘したように、手づくね成形土師器自体が町内遺跡では客体的でごく少量しかみられない。居館に隣接する赤松遺跡にしても、皿G模倣の皿が出土しているものの、大半がロク口成形土師器であったことをみれば、居館跡と同程度に京都系土師器が使用されていたかは疑わしい。推測を重ねるならば、京都系土師器の使用が赤松氏に直接関わる場にほぼ限定されていた可能性も考えられる。京都系土師器、換言すれば手づくね成形土師器の生産・使用は、上郡町域に広く普及するものではなかったようだ。この点も上郡町域に複数の工人が展開していたことをうかがわせる材料と

なるだろう。

おわりに

以上、雑駁ながら赤松居館跡をはじめとする上郡町域の資料を検討した。年代の厳密な議論を可能にする材料が乏しいうえに、西播磨や備前など隣接地域との比較もできなかったために推論に議論を重ねる議論となってしまったが、まずはひとつの叩き台を提示するものである。

いまなお全容を明らかにしがたい西播磨地域において、上郡町域の土師器は中世全体を見通すことが可能な資料であることは疑いない。次に問題となるのは、上郡町域内での地域差の存在や、京都系土師器の分布の偏りの背景であるが、これも今後の課題としておきたい。

成稿にあたっては、赤松居館跡の調査を担当された島田拓氏をはじめ、ひょうご歴史研究室中世赤松氏と山城研究班の諸兄には多大なるご厚意を賜った。とくに大村拓生氏・山上雅弘氏からは種々ご教示を賜った。末筆ながら感謝申し上げます。

註

- (1) 上郡町教育委員会『赤松居館跡一』（赤松氏関連遺跡調査報告書一、二〇二二年）。
- (2) 播磨地域の細分は大きく東西に二分する例や北・中・東・西と現代の行政区分を準用する例など論者によってさまざまである。本稿では現代の行政区分に準じた細分を採用し、現代のたつの市・太子町以西を西播磨と呼ぶことにする。
- (3) 中井淳史「中世播磨の土師器様相」（全国シンポジウム「中世窯業の諸相」生産技術の展開と編年）「実行委員会編『中世窯業の諸相』生産技術の展開と編年」補遺編、二〇〇七年）。なお、旧稿では「西播磨」として現姫路市域も含めていた。
- (4) 本稿で言及した土師器は上郡町教育委員会島田拓氏のご厚意で、兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室赤松氏と山城研究班の活動の一環として実見の機会を得た。本稿はその時に得た知見に基づくが、引用資料の詳細なデータは調査報告書に依拠している。また、文中の挿図（第一・三・五図）はすべて各報告書掲載の土器実測図を再構成し、稿者が再トレースしたものである。その際に挿図の統一をはかる目的から若干の修正をおこなった。意図に反した修正があればすべて稿者に責があることを断つておくとともに、適宜報告書を参照いただきたい。
- (5) 前掲註一文献。
- (6) 中井淳史「土師器」（日本中世土器研究会編『新版概説 中世の土器・陶磁器』、二〇二二年）。
- (7) 京都産土師器については多数の分類案や編年が提示されているが、ここでは拙稿の分類案に依拠した。前掲註六文献。
- (8) 中井淳史『日本中世土師器の研究』中央公論社、二〇一一年（初出二〇〇三年）。
- (9) 大村拓生「在京守護期の赤松地区と禅院の諸相」（『ひょうご歴史研究室紀要』第三号、二〇一八年）。同「南北朝赤松一族の動向と赤松地区」（『ひょうご歴史研究室紀要』第五号、二〇二〇年）など。
- (10) 前掲註一文献。
- (11) 重根弘和「備前」（日本中世土器研究会編『新版概説 中世の土器・陶磁器』、二〇二二年）。
- (12) 上郡町教育委員会『赤松遺跡一』（赤松氏関連遺跡調査報告書二、二〇二二年）。
- (13) なお、遺物包含層では手づくね成形土師器（京都系土師器）が若干ながら出土している京都系土師器の範疇に含まれるもので、口径七・〇センチ、一一・〇～一二・〇センチの大小二法量である。前者は京都産土師器の皿G、後者は皿Fないし皿Hの器形を模倣する。整形手法も京都のそれを踏襲しているが、ナデ調整がきわめて弱く不明瞭な点も赤松居館跡とほぼ共通する。
- (14) 前掲註一二文献。
- (15) 兵庫県教育委員会『山野里宿遺跡』（兵庫県文化財調査報告第四〇五冊、二〇一一年）。

(16) 遺跡全体でも手づくね成形土師器は数点程度しか出土していない。ある程度の時期幅を考える必要はあるが、この遺跡では基本的にロク口成形土師器が消費されていたとみてよさそうだ。

(17) 一四世紀以降機能し、一六世紀後半には埋没したものと考えられている。また山田清朝「播磨西部・千種川流域の流通拠点 山野里宿遺跡の調査から」(日本中世土器研究会『第三二回 中世土器研究会 公開シンポジウム瀬戸内の河海からみえる中世物流の世界』資料集、二〇一二年)を参照。

(18) 上郡町教育委員会・上郡町埋蔵文化財調査委員会『西野山・堀遺跡』(上郡町文化財調査報告一、一九九七年)。

(19) 島田拓『赤松氏のふるさとをゆく』(平成二九年上郡町郷土資料館特別展)、上郡町郷土資料館、二〇一七年。

(20) 島田拓「赤松遺跡出土の土師器皿について」(前掲註一二文献所収)、二〇二二年。

(21) 山野里宿遺跡は上郡町教育委員会が調査した資料があるが(未報告)、これらを赤松遺跡SK〇九に続く一五世紀後半代に位置づける。

(22) 前掲註三文献。

(23) 前掲註八文献。また鈴木康之・北島大輔・草原孝典「山陽」、池澤俊幸・島田豊彰・首藤久土・長井博志「四国」(いずれも日本中世土器研究会編『新版

概説 中世の土器・陶磁器』、二〇二二年)。

(24) 前掲註三文献。

(25) 中井淳史「中世末期における土師器工人の存在様態 土佐国『長宗我部地検帳』を題材に」(史学研究会『史林』九九巻四号、二〇一六年)。

(26) 神戸市教育委員会『祇園遺跡第五次発掘調査報告書』、二〇〇〇年。兵庫県教育委員会『楠・荒田町遺跡』(兵庫県文化財調査報告一六二、一九九七年)、同『楠・荒田町遺跡』(兵庫県文化財調査報告三三九、二〇〇八年)など。

(27) 前掲註三文献。